平成31年2月11日(月) 日本海新聞

日々往来

田口 哲也

高校生の視点の高さ

先ごろ、金融広報中央委員会が公表した「金融と経済を考える」高校生小論文コンクールの入賞作品は、例年以上に力作が多かった。今回初めて、鳥取県の生徒が特選に入賞したのも、うれしいニュースだ。

倉吉東高の杉浦公祐さんの作品では、高福祉高負担国スウェーデンとわが国の税制や社会保障の質との違いを国民の働く意欲に及ぼす影響にさかのぼって論じ、「暮らしやすさは、自由と平等のバランスを国がどれだけ上手に配分するかにかかっている」と指摘している。また、スウェーデンが直面する移民問題が、国民にジレンマをもたらしかねないことにも目配りしている。

同じく特選に入賞した他の4編では▽国や地域により異なる「幸せ」の多様性▽食の観点からの子どもの貧困対策▽「三方よし」に環境や社会を考えた「エシカル消費」の視点を加味した貧困解決策▽既存の組織や企業では難しい問題を柔軟に解決する方法としての「起業」―が論じられている。

これらの作品の行間からは、「今の世界のことを一番鋭く見ているのは若者」という自負がにじむとともに、社会性を持ったボーダーレスな視点に立って課題解決策や価値の多様性を考える姿勢がうかがわれ、正直なところ舌を巻いた。

複数の作品において、企業人でもなかなか理解が難しい国連の包括的アジェンダ「持続可能な開発目標(SDGs)」が、ごく自然に参照されていることにも感心した。

こうした感性や問題意識を備えたイマドキの高校生たちの目線に応えるためには、地域志向人材の育成・定着の観点からみて、単に彼ら・彼女らに田舎暮らしの良さや個々の企業のネーム、都会と比べ金のかからない生活などを知らしめるだけでは足りないのかもしれない。それでなくとも、就社意識が薄れ、転職市場でのマーケット・バリューに敏感な若者が多くを占める時代である。

産・学・官にとっては、地元大学などで学べる知識やスキル、地元企業への就職や起業を通じて果たせる社会的役割が、地域社会の課題解決や産業クラスターの将来の姿とどうつながっていくのか、生徒・学生たちへ全体像をマッピングしてみせるような工夫も求められているのではないだろうか。

(日本銀行鳥取事務所長)